

土塚

牧瀬菊枝

土着する かあちゃんたち

太平洋出版社

まきせ きくえ
牧瀬 菊枝

1911年静岡県に生れる。1932年実践女子専門学校(現・実践女子大)国文科を卒業。戦前の解放運動にたずさわった女性たち、農村の主婦たちのたたかいの聞き書きをつづけている。主な編著に『ひき裂かれて——母の戦争体験』『丹野セツ——革命運動に生きる』(いずれも共編)などがある

聞き書 三里塚 土着するかあちゃんたち

1973年11月20日 第1刷発行

1975年1月20日 第3刷発行

著 者 牧瀬 菊枝

発行者 東京都千代田区西神田 崔 容 徳

印刷者 東京都板橋区舟渡1-8-1 ミツワ印刷

発行者 東京都千代田区西神田1-2-15 石合ビル

株式会社 太平出版社 ©

TEL291-9744・9752, 94-7083 振替東京99563

乱丁・落丁本はおとりかえいたします



土着する かあちゃんたち

牧瀬菊枝

太平洋出版社



聞き書 三里塚

土着するかあちやんたち

牧瀬菊枝

太平出版社

目次

I たたかひの日々を語る……………11

1 その後の三里塚——長谷川たけさん、鈴木千代さん、ほか……………12

大竹ハナ、共同墓地を売る19 百姓はどこからも月給もらっていない！22 婦人行動隊長、長谷川さん25 国を相手のけんか27 機動隊なんか、もうこわくない32 目的は同じだからけんかしない36 ある日の三里塚42

2 女で最初に逮捕されたひと——浜野ことさん……………44

石投げなくても逮捕されただ！45 かなりっぱな土地を……………52 闘争はじまってから強くなった54

3 ハチエモ新宅のおばあさん——岩沢なかさん……………57

機動隊員をなでるおばあさん61 三月三日のたたかい64 「市民の皆様さん！」と訴える66 第六地点の落とされるとき68 大臣との面接で死ぬのは本望だ71 大木よねさんの家の代執行74 機動隊に強くされたおばあさん76 ご先祖のこと、子どものころのこと80

4 鉄塔の立案者——岩沢吉井さん……………85

六〇年の社会的キャリア86 つねに先を読んで拠点づくりを90

II 東峰のおかあさんたち

..... 95

1 島村さんの家で——島村良助・初枝さん、染谷かつさん、ほか..... 96

東峰、駒の頭の人たち 96 土をかわいがり、種をまき、それがすくすく育つのがいちばん幸福だ 102 「成田空港」は公共事業ではない！ 118

2 梅沢さんの家で——梅沢きみさん、石井こうさん、堀越みのさん..... 124

「三日戦争」のこと 126 家宅捜査 130 親と子と学生と 135

3 川島さんの家で——川島みつ江さん、関根とめさん、国井ひで子さん..... 144

開拓のころ 144 つぎつぎ捕えられる若者たち 147 生きて帰れねえと思った第二次執行 150 鉄砲もってない戦争だ、強制測量は 152 機動隊の悪行 154 東峰十字路で 158

III 過去の苦労が闘争をささえる

..... 165

1 反対同盟副委員長とその母——石橋政次・たつさん..... 166

子育ての苦労を語る 166 同盟休校についての考え 177 条件派になった人たち 179 空港問題の見通し 180

2 「あいや」のおばあさん——瓜生つるさん..... 185

闘争資金調達のフルバイト 186 空港・沖縄・ベトナム 188 文男さんはたたかい疲れて..... 192

3 一七年の忍苦が闘争をささえている——瀬利くらさん..... 199

子どものころ 199 結婚、夫の営外居住——出征 201 夫の帰還 206

4 闘争がいちばん楽しかった——大木よねさん……………213

七つの子守り²¹⁴ 成田山であきない²¹⁷ 結婚²¹⁸ 戦争中のこと²¹⁹

クソ袋と刀でたたかうだ！²²⁶

5 部落のまとめ役——小川やすさん……………230

部落あげての労力カンバ²³⁴ さいごは自分とのたたかい²³⁷

IV 三里塚のかあちゃん、中国を行く……………243

1 訪中代表 郡司とめさんに聞く……………244

至れり尽せりの歓待²⁴⁴ 雑草のない国²⁴⁵ 銀輪、朝陽に輝く²⁴⁷ 沙

石峪の人たち²⁴⁷ 穴があったら入りたい²⁴⁹ 権力の弾圧というこ

と²⁵¹ 八時の太陽²⁵³ 解放された人民²⁵⁵ のびのびと、しかも整然

と²⁵⁸ あらためて空港粉碎！²⁶⁰

2 訪中代表 小川たけさんに聞く……………261

自力更生の農業²⁶¹ ツルハシー七挺が壊れても²⁶⁴ しあわせな人

民²⁶⁶ 周総理との会見²⁶⁸

あとがき……………273

三里塚空港敷地周辺地図……………10

三里塚闘争略年表……………276

三里塚空港敷地周辺地図



I たたかいの日々を語る

1 その後の三里塚——長谷川たけさん、郡司とめさん、鈴木千代さん、

宮本由美子さん、ほか

六〇歳すぎたわたしたち二人が三里塚へ行く。ひろびろとした北総台地の冬は寒さがきびしい。望月寿美子さんとわたしは冷たい風のなかを背をまるめて歩く。

初めはかなりの緊張感をもって三里塚のおかあさんがたを訪ねていたが、いまは少しずつ慣れてきた。京成線成田駅前から天神峰の現地闘争本部へ行くには、午前中は九時四〇分のバスしかないこともわかって、その時間にあわせて、総武線都賀駅から乗る。まえの日に都賀駅近くの望月さんの家に泊めてもらい、お弁当も用意してもらって、二人で早朝の白い霜を踏んで出かける。

こうして三里塚行脚をつづけているわたしを内がわからささえているものはなにか。それは遠い日のわたしの戦争体験である。

一九三〇年代に、すでに日本の左翼運動ははげしい弾圧によって後退を余儀なくされていた。一九三三年の佐野・鍋山の転向によって拍車を加え、戦争への道をまっしぐらに進んでいった。その時期、

わたしは遅まきながら自分の歩む方向を決めようとしていた。今から三十数年前のことである。

一九三七年七月七日、中国で「蘆溝橋事件」の起こされた日、わたしは治安維持法違反で入獄する人と自分の生活を結びつけようと決意した。やがて刑期を終えて出てきた人とともに住み、ようやく子どもが生れた二週間後の一九四一年一月、ふたたびかれは捕えられた。治安維持法に違反する何かの行爲があつたわけではない。刑を終えた者には思想犯保護観察法などによる監視がきびしく、なにもしなくてはならなかった。しかし、黙っていることが戦争への非協力とみなされる時代であつた。そのようにして、当局が作りあげた治安維持法違反容疑で、わたしのまわりの友人たちはみな検挙されていった。

赤ん坊を背負つて予防拘禁所への面会に通う日々は、世を挙げて「一億一心」の戦争さなかであつた。「国賊」の母子に向ける隣組の目は冷たく、身近な親戚のあからさまな敵意のなかで、わたしは孤立していた。

戦火のかげで、ひそかに行われる思想弾圧のむごさこそが、わたしにとっての戦争体験であつた。

敗戦後のわたしのささやかな行動はみな、この戦争体験に根ざしていた。戦後の華やかな民主化運動も、朝鮮戦争によって、きびしい弾圧にあい、ふたたび退潮期を迎えなければならなかつた。わたしの戦争体験反省の甘さをいやというほど知らされた。

そのころ鶴見和子さんから生活記録のサークルの呼びかけがあつた。自分の戦後の歩みを反省するためには生活記録がどうしても必要なのだと考え、わたしはこの仲間に入った。このサークルに、わたしの少女時代からの友だち、望月さんを誘つた。

一九五九年、この生活記録のサークルは、子どもを戦争にまきこんだ痛苦の思いを『ひき裂かれて——母の戦争体験』（鶴見和子・牧瀬菊枝編）としてまとめた。望月さんはそのなかに疎開学童のわが子の姿を描いた。わたしは治安維持法によってひき裂かれた母子の生活を書いた。

その少しまえ、一九五六年一〇月一日、砂川基地拡張反対闘争の激突の日、鶴見さんに誘われて、わたしは雨の砂川に行った。そのとき、望月さんも一緒だった。炊き出しの手伝いのつもりで行ったのに、まごまごするうち、わたしたちは押しよせてきた機動隊にとりまかれていた。そのときの機動隊は帽子も布製で、まだヘルメットやジュラルミンの盾はもっていなかった。抵抗する学生もワイシャツ姿だった。イモ畑をふみにじり、白いシャツを血に染めた学生をなおもなぐろうとする警官に、望月さんは雨傘をふりあげ、「これはうちの子よ、なぐらないで！」と叫んだ。警官は一瞬ひるみ、そのすきに学生は逃げた。疎開学童だった息子が大学生になっていた望月さんには、同じ年ごろの学生はみな自分の子に思えた。砂川の雨と泥のなかで望月さんは権力の正体をはっきり見たのだった。

砂川のおかあさんがたと、のちに話しあいをしたとき、砂川きつての旧家の主婦である砂川千代さんは語った。「今まで法律や警察はわたしたちの土地や財産を守ってくれるものとはかり思って、保守党を支持してきましたが、こんどは目がさめました。法律や警察はわたしたちの土地や財産を守ってくれないことが、はっきりわかりました」（これは、三里塚で立木にからだを鎖でゆわえつけて抵抗するおかあさんが、「クニというものがなにか、はっきりわかった」といったのに通じる）。

このような戦後体験をもちながらも、わがサークルの戦争体験記録集は、そのほとんどが戦争にまきこまれた母たちの愚痴と泣きごとであり、戦争中におとなであった世代としての自らへの戦争責任

の追究まではできなかった。母たちが自分の歴史を客観的に書くにはどうしたらよいか。その方法がみつからず、ゆきなやんでいたわたしは、広島島の農村のサークルで民話と生活記録を育ててきた山代巴さんとの交流から、山代さんのサークルも似たような壁にぶつかっていることを知った。山代さんとわたしは、力をあわせて生活記録の壁を破る方法を試みようと考えた。

多くの母たちは時代の激流に押し流されてきたので、ひとりでは自分を立体的に書くことはできない。一つの座標と比較してでなければ、自分の歩みを客観視し、立体的に描きだすことはできないのではない。そのための「動かぬ座標」として、山代さんは丹野セツさんの名を挙げた。丹野さんは日本の労働者解放運動の黎明期といわれる「南葛魂」のなかで育ち、その伝統を守って、戦争中も獄中であって抵抗をつづけてきた人で、一九二八年当時の日本共産党婦人部長であった。この人の話を聞き書きして、これを討論・追究した記録をつくり、これを中心に据えるならば、自分たちのサークルで書く母たちの歴史を戦争責任追究にまで深めていくことができるだろうと考えた。山代さんとわたしは五年余の模索を重ね、『丹野セツ——革命運動に生きる』を一九六九年にまとめた。

しかしこの「動かぬ座標」ができたからといって、わがサークルは年をとったせいもあり、書くことはあまり進んだわけではない。そのなかで望月さんは「六〇年安保」「七〇年安保」のデモに参加し、傷ついた若者たちへの救援に献身してきた。その活躍ぶりは、からだの弱いわたしのとうてい及ぶものではなかった。そのあいだに望月さんは夫を亡くし、二人の子どもをりっぱに成人させてのち、自分一人の家を総武沿線にもって、独立の生活にふみだした。望月さんは、今後の生活をだれにもわずらわされずに救援の仕事にささげようというのであった。